



Title	倉橋由美子と楊沫の比較研究：性と政治を軸に
Author(s)	朴，銀姫
Citation	大阪大学，2004，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44771
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	朴 銀 姫
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 18311 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 16 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	倉橋由美子と楊沫の比較研究－性と政治を軸に－
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 内 藤 高 (副査) 教 授 出 原 隆 俊 教 授 高 橋 文 治

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、倉橋由美子と中国の作家楊沫（1914－1995）の文学を、女性としての〈性〉と〈政治〉への姿勢を主な観点として対比して論じた研究である。序章－先行研究及び研究方法、第一章 性の提起－第三の性と女性英雄、第二章 性と政治－他者として社会的自我として、第三章 性差の極大化－倉橋由美子の小説の展開、第四章 性差の極小化－楊沫の小説の展開、終章 同時代の差異－性の自律と自立、以上の章立てから成る、400 字原稿用紙換算で約 550 枚の論文である。さらに参考資料として、両作家に関する詳細な年譜が付けられている。

本論文の具体的な内容を辿れば、序章では両作家の生い立ち、二人が文学へと向かう家庭や思想的背景が述べられた上で、両作家を比較することの意味が主張されている。第一章では、倉橋の『パルタイ』と楊沫の『青春の歌』が取り上げられ、それぞれの女性主人公の生き方、とりわけ恋愛、性の問題がまず提示され、第二章では、同じ作品について、第一章で分析された女性主人公の男性との関係の中で、政治に対する距離の遠近がどのように現れるかの比較を問題としている。第三章では、ボーヴォワールなどの影響が強かった倉橋の初期作品に対して、その後の文学作品やエッセーを主に取り上げ、結婚、留学、出産などを経て倉橋の中に確立していく女性の独自性についての認識について論じている。夫婦関係や台所などの家事空間をある意味では戦略的に利用しながら、柔軟に〈女性〉を貫こうとしている主人公たちの姿が、数多くの作品の分析を通して強調されている。これに対して、第四章では、楊沫の場合、後の作品『英華の歌』などに見られるように、結婚、出産後も、依然として政治的英雄であることにこだわり、家事とのギャップに悩むヒロイン、政治という一種の〈男性原理〉との同一化の中に留まる女性主人公のあり方が指摘されている。終章では、現在の視点から、これまでの論が再確認され、性差の〈極大化〉と〈極小化〉という言葉に集約されるような両作家のコントラストが結論として提示されている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文において著者は倉橋由美子の作品を非常に丁寧に読んでおり、特にまだ先行研究の少ない 80 年代以降の作品も視野に収めながら、初期作品からの変容を論じている点など方法として高く評価でき、得られた結論も説得力のあるものとなっている。論述の展開も無理がなく、日本語力も基本的には問題がない。また参考資料として付された

年譜も詳細で論文の理解をよく助けるものとなっている。全体として、準備にかけた著者の努力のあとが十分に窺われる論文となっている。

しかし、さらに検討すべき点、改良点があることも確かである。倉橋由美子と楊沫を対比させて考察しているが、対比の根拠を明確に提示すること、対比の観点をできるだけ同じレベルで行うことなどへの配慮がやや不十分で、単独の倉橋論、楊沫論の並置になっているきらいがある。倉橋に関しては多数の作品を取り扱っているが、楊沫に関してはほぼ『青春の歌』一作のみといってよく、倉橋を分析するときに用いられたような多様な観点が、楊沫の分析にはでてこないで全体としてややアンバランスになっている。また『青春の歌』が書かれた時代背景や当時のこの作品の評価など中国の中での意味をさらに説明すれば、日本と中国でそれぞれの作家が問題としようとした点の違いなどより明確化されたと思われる。また分析用語で不正確に用いられている場合があること、漢字、日本語表現の使い方などでミスがやや目に付くことも事実である。

こうした問題点、改良点があるものの、それは、女性の性と政治への関わりを軸として日本と中国の現代文学を比較しようとした、大規模であると同時に細心の注意を必要とする課題に意欲的に取り組み、十分な成果を出した本論文の価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。